

特40

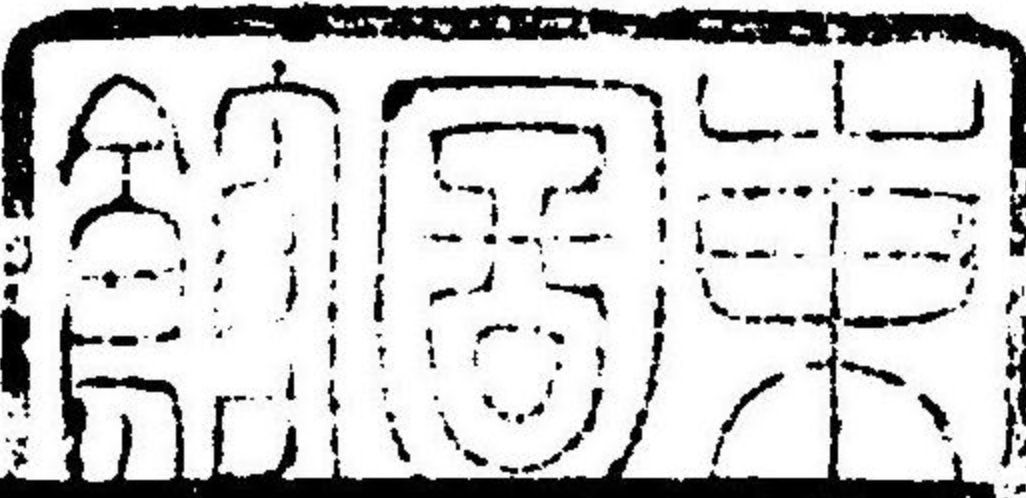
41

東 京 圖 書 館

七 冊	一 七 號	別 二 架	八 八 函	山 說 類	和 書 門
--------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

三七全傳南柯夢

卷六下



東洲全集

傳南柯夢卷之六下

東都 曲亭馬琴編次

長町の五味下

敷浪嘆息

ぞも思ひやる。その嫩さを慰る。陪從の童を進むべし。といひかぎ
 て縁頼えんたのり立出たていで外面うへまへをせし招まねは豫あらかてこゝろや得たりきん。一人ひとりの奴
 隸べつり轎こしの戸こを細こやりに引開ひきあて。り抱いだ抱いだ來きる稚兒わらわを三勝さんかつは遙はるか見みて
 且かつ不審ふしんみ。且かつ歡喜くわんぎ忙いそ忙いそを走はりより。喃なお通喜つうぎ一ひとや恙やなかりしかと思
 はず莞爾わんじと字あま笑わらて抱いだ抱いだせれば小躍こせどりし。やよ母御ははみこを見たまへ。志
 々しぬ叔おやま阿婆あはやまが。この赤あかい衣え三つも四つも縫刺ぬい刺たて俄頃たひなに被か
 せ。かゝる木偶ぼくやへぬまをりし。と弄賣なうり間に敷浪しななみハ舊ふるの處ところに坐まして
 又また三勝さんかつに對むかひ。憂うれ茂も慰なぐさめるそなぬの陪從へいじゆにハ。その女めの童わらわにますもの

ちとじ寔にその子の命はよせ。こが子曾太郎ハ。父のふよりその長
 町茂徘徊し潜に半七の今の爲体茂窺なむ。いひ寄るよすがを得
 ざりしは。竹あくのあきを訪ず。せきは旅寐の徒然なるまゝ。昨
 夕堀江に赴く折しも。相合川のほせりにて鬨聲起り。打あふ太刀の
 光りにておれ茂見れば。半七を全八なり。三勝を稚児女兒。周章見
 るに痛しく。潜にお通茂。河原傳ひに走り退しむ。こらぐず
 も蝶九郎が手携茂。負て脱れ來たる。出ひしは。矢庭よおれ茂
 生拘て。舊の宿よおて歸りつ。てじめよりおのお通茂半七の子を
 る。ト一夜を旅宿よせ。めて。せましく。いひ慰めぬ。をぞ。しか
 る。こが身もせ。父は曾太郎の旅宿よ到着して。緣由茂聞。遂に轎よ
 り。父乗して。おて來たりぬ。これやおの稚兒茂も。その父に換御身
 の憂苦茂慰る。心はりの贈もの。納めま。い。か。は。り。か。歡。し。を

侍ぐめ。と事審に説示せば。三勝つくく。を聞て。抱れあるお通茂。敷
 浪のほせりに押遣り。おん好意ハ喜しを侍れど。いづれなりとも隻
 親に離る。その子の薄命。大和へ伴ひ御身が孫とも。見おあ。い。ぬ
 ま。い。は。貧。し。母が養育に。こ。ま。して。久。後。ぬ。の。も。い。か。ト。ん。縦。夫。と
 何ともいへ。思ひ絶に。死妹。脊の契。互代の護身囊。茂。おの爐の中へ。投
 入れて。願事復す。産靈の庭燎とも。見給へ。か。し。と。誓。ひ。茂。ハ。り。白。や。か
 なる項に掛ある。護身囊の紐。か。い。外。せ。は。と。と。と。落。る。三。味。線。の。撥
 の片割か。ぬ。へ。より。敷。浪。お。れ。茂。見。て。大。に。怪。し。や。よ。待。た。ま。へ。と。押。と
 と。先。不。審。や。おの撥の片割。こ。が。身。從。來。認。り。り。い。か。に。し。て。り。所
 持し。ぬ。ま。ふ。も。し。そ。な。ぬ。の。乳。名。茂。お。さん。と。い。い。ハ。ざ。り。し。か。護。身。囊
 に納たる。臍帯の。り。も。や。する。お。ト。し。ぬ。ま。へ。と。い。お。が。せ。ば。三。勝。と
 と。見。か。字。見。て。ぞ。宜。へ。ば。森。々。と。思。ひ。當。る。像。見。の。二。種。わ。ト。ハ。が。乳。名

へおせんと呼ば。丹波太郎といひつる人の女兒にて侍るなり。せて
 おん身ておの年來。神に祈願。成かす竭し。思ひ慕ひ奉りし。母御に
 てましますか。字べこれおぼせ。實母あれ。とはくいかに。と携る手
 に。お通も中へ引寄して。果ハ涙の川の字に。親子三人が袖の雨淵瀬
 とかひる歎あり。且して三勝を。胸前を拵下し。三才の年に別れ奉り
 て。面影は認め終と。名告り。ふ時。撥を割符と。爹々の遺言。けふまで存
 命たまひなは。そこを歡びたまへ。え。とかき口説は敷浪のいと。面
 なき風情にて。あらぬ事とて外がましく。いひつる事の悔しきよ。と
 おはし。瘡を押放る。懷よりとり出す。撥の片割をひとつに合し。思ひ
 出るもいく年ぞや。前夫の浪々の便なきまゝに。三才のそなたに乳
 房を放し。夫婦倦ぬ別して。ごが身ハ浴へ上り。おかして後て夫や子
 の。往方何國と。あらざりき。さては。爹々のなき人の。數にさへ入給ひ

しか。その何比ぞと。問母も。問るゝ女兒も。もろとも。胸ふたがりて
 顔にも應ず。それほどよごが父も。盲目となりて。髪を剃。いとさりけ
 なき琵琶法師。名も丹波都と更えて。伊勢に四年の僑居。其處にさへ
 住みこぼつ。御身の在處を訪んとて。ごらへを將て。首途し。こるゝ
 浴へ上りたまふ。是なん死出のやま。と路よて。山兒の斧。よ撃れ。非命
 よ世を去りたまひたる。首尾ハ箇様々や。半六が事。鞆條が事。奈良
 と浴の一五一十を。物語れは敷浪ハ。ごが子に羞る身の幸福。綾や錦
 に装たて。も。ごらの襪。襪ハ。寒々しき。そなたよと。遙よ劣りて。鈍
 くも缺たる婦の道。夫よ別れしその年。浴へは上りぬれど。給事せ
 んよすがもなく。大和なる續井家の老臣。蟻松典膳といふ人の内室。
 世を早字し。跡よ遺れる稚兒よ。乳母を索るとき。て。なほ乳汁の潤
 ざるを幸ひに。大和へ赴き。聽てその家に奉公して。守育たるを。曾太

郎なり。かくて故郷へ消息し。こが身南都にあるよしを。夫の家へ告
 遣りしが。夫と近曾女兒を携。旅たちてより往方忘れずとて。終届
 ぬ東路より。ふた、移戻る文卷川の。さそふ水まつとよそ所ら終ど。
 典膳とのに不圖思はれ。一夜ふた夜の添臥に。そやくも有身て産を
 し子と。半七へ妻あてせたる園花なり。されはよや世の人に。馬士船
 長とならべいとる、お乳の人も。猛に老臣の後妻に引あげられ。安
 らかよ年月を送るよつけても。忘れがたきはそなたの事。心のたの
 みは三味線の撥はふた、び合ながら。稚きよりわが女兒を。育さし
 たる恩ある人。平三とのとやトんに一言の。禮謝いはれぬ。悪因縁姉
 の夫を妹に。對せんとする羞をトす。蓮き母がこゝろに似よとて。園
 花よも操を破り。半七が事を思ひ絶よ。といく度かす、えても。承引
 されはせんすべなく。又阿容々々と爰へ來て。道理先かしてわり口

説。忠臣烈女の中を。厘をもへばわれ淫婦。愛も溺きて又愛を。失ふ
 因果の忽地に。親子三すぢのいと迫て。天道の縛ハ。割符を合す罰と
 撥。面目なやと身を投臥。聲を惜ず。泣母の脊拵。捺る三勝ハ。そを理と
 もいひか終て。名告あへは園花とのハ。妹なれども異父兄弟。義理あ
 るかたに夫を配偶し。これを菩提の種よして。浮世の外の山こもり
 ハ。なかく安くはべりなん。わらハ、思ひ諦たり。いたくな歎たま
 ひを。と諫れはうち點頭。女兒とあつてハ半七と。いよ、縁を離さ終
 は。今の夫と半六とのに。母子と見えより馴合て。逃も奔らしたりな
 んと、疑る、ともいひときがたし。よしなやとるく。尋來て。孝と
 貞とハ人あまよ。勝れし女兒に歎きをまさし。われも又いかばかり。
 憂をましろの猿智意が。仇となりぬる悔いさよ。せえてお通を將て
 歸。養育ハ丹波都どのと。せあぬへの罪滅し園花が爲よハ姪。わがな

き後も疎にハ思ハじ。けふまでとらぬ祖母と叔母に養育る、この子の幸なさを春にもならハ志のむく。逢しに來すであるべきぞ。と聞へたらして潜然と涙くみ居るお通茂引よし。實の孫ともとらざりしが。この愛々しさに絆されて。他の子のこゝちハせざりし。恩がましく將て來つる。鬼婆々とな思ひたまひせ。わが身ハたなたの實の祖母さま。豈は大和へ伴ひかへり。欲といふものは何にまれ得さすべきぞ。歡びたまひ。嗚乎胸苦しと立あがり。孫を引く手もちからなく。いひ賺されて稚兒は。又木偶を貰ふて來ん。母御よ豈は爹々さまを迎に來して玉はれ。といハあなき言の葉の露は袂におさあまり。目送り見かへる親と子が。果敢なき別れを告わたる。諸行無常の鐘の聲。この入相はは終よりも。こゝろ細さぞいやましぬ。かくて敷浪ハ三勝に別を告。や、外面へ立出て。お通茂乘する轎の内にも

よと泣聲を。もれ聞て三勝ハ。もし園花よハあらぬか。と思ふもの。かト走り出。呼とむる間に奴隷とも。や檣出す轎よ。少し後れて敷浪ハ。小首傾け泣顔を見せじと。後引添たり。折しもあれ編笠深く。たたる武士二人。右手左手引こかれて。前より生垣の蔭に竊聞き。目今敷浪が歸るを見て。或ハ歎息し。或ハひとりうらみ點頭。みち引まがへて立わかれつ。往方も忘れずなりにけり。三勝それハ心もとめず遙よ彼方を目送れハ。姿臙々黄昏て。師走七日のけふ。かトずも。あふを別の母親の後影も。こが子の顔も。見つるハこれをかたりにか。と思へハ胸も板庇を。漏夕月を心めてよ。ふた、び裡へ泣入る。庖福の障子をさと開くを。誰そと見れハ半七なり。そのとき半七ハ三勝に對ていふやう。これ嚮に背門より歸り入て。一五一十を審よ聞けり。みな是過世の警敵が。今親子となり。同胞となり。夫婦となり

て。この煩惱をなすにこそ。父の蟄居を許されたまへんは本意なれど。義を捨て舅に佞眉。豈阿容々々と南都へ歸トんや。加之相合橋にて全八を殺せし事。夜行翁が訴によりて。てや市の正より討手を向らるゝと風聲す。まかりといへども。蝶九郎をとり脱したれば。這奴等を賊なりといはんよ。證據なし。且己を得ずといへども。厚倉氏よ。いひつるを食て。この七年が程。御身ともろ共よ世の警を致し。剩身價を返さず。これハ是亂離の人なり。何をもて忠義といへん。とてもかくても半七が死べさハ今宵なり。さればとて。こゝよ。自害せば平三のを係累せん歎。彼青山の酒なとで。無明の醉を千日寺の草の原にて醒よ。まかす。己なん己なんといひも果ず。走り去らんとする夫の裳を。三勝ハ慌忙て引留め。手を束て絞首刎られ。主親の面を汚んより。自殺せんと思ひ定めたまふを。理なとずとい

思ひ侍トねど。もろ共にとい聞へたまハで。なめてかくまで三勝をいぶせきもの。にハ忘たまひつる。今宵よ迫る身の憂ハ。彼處よて聞たまはずや。こゝハまづこの處よて。亦よ伏し。君が年來の情よ。答侍りてん。といひも終らず。夫の刀に手を掛れば。半七急よ押とめ。けよ思ひ悞ぬ。儒ぬ先こそ露をも厭へ。夫婦が上も厭ふてかひなし。今こそ御身も。己が手にあけて。志を致さすべし。只悔しきハ。白河よて得死すして。平三の、誠心を。他にするのみ。面目なき。と身を恨こそ理なれ。三勝いたくう泣て。有身の親。養親と。親ハ夥もちなが。何れをいづれと。こまがたき。恩を仇なる身の終。せえて一筆遺さん。とて。あけ硯の蓋反らへし。墨ハ曲れと直なる管の筆をこゝろと硯に浸し。出居の障子よかくハあり。

夫木集信實朝臣

さらまほし身のうき時のふくれ簀何かの山の奥もあらじ死
と書寫せば半七ももろとも筆をとりて。

同集雜十四衣笠内府

ふくれ女のうき名をかかずかたもなし心に鬼をつくる身なれば
と書どゝえ筆をすつれば外面より羣り來たる捕手の兵士相合橋
にて人を殺せし半七を搦捕らん爲に向ふたり縛受よといさま死
て跳かゝるを引被た雄手雌手へ撲地と投るを飛輪て又組着をふ
り拂ひてハ打倒しはトぞくと投退て誘たまひとて半七ハ妻の
手を引走り出る月にハ暗き諸打戸とが門近く歸り來る平三直と
ゆさちがひ見かへりてそハ三勝歟壻とのにハトすやと問隙も
荒男の兵士等が驚直に半七遣ふと追蒐出先にすむを平三が

足を飛して丁と蹴倒し續て懸るをどつて引布こ、がまはずに。と
ゆふまくれ應もやらず掌を合しふし拜あつ、妹と夫が又手をと
りて死にゆく。今宵一夜汝千日の墓なきものハ命あり。

千日寺の証

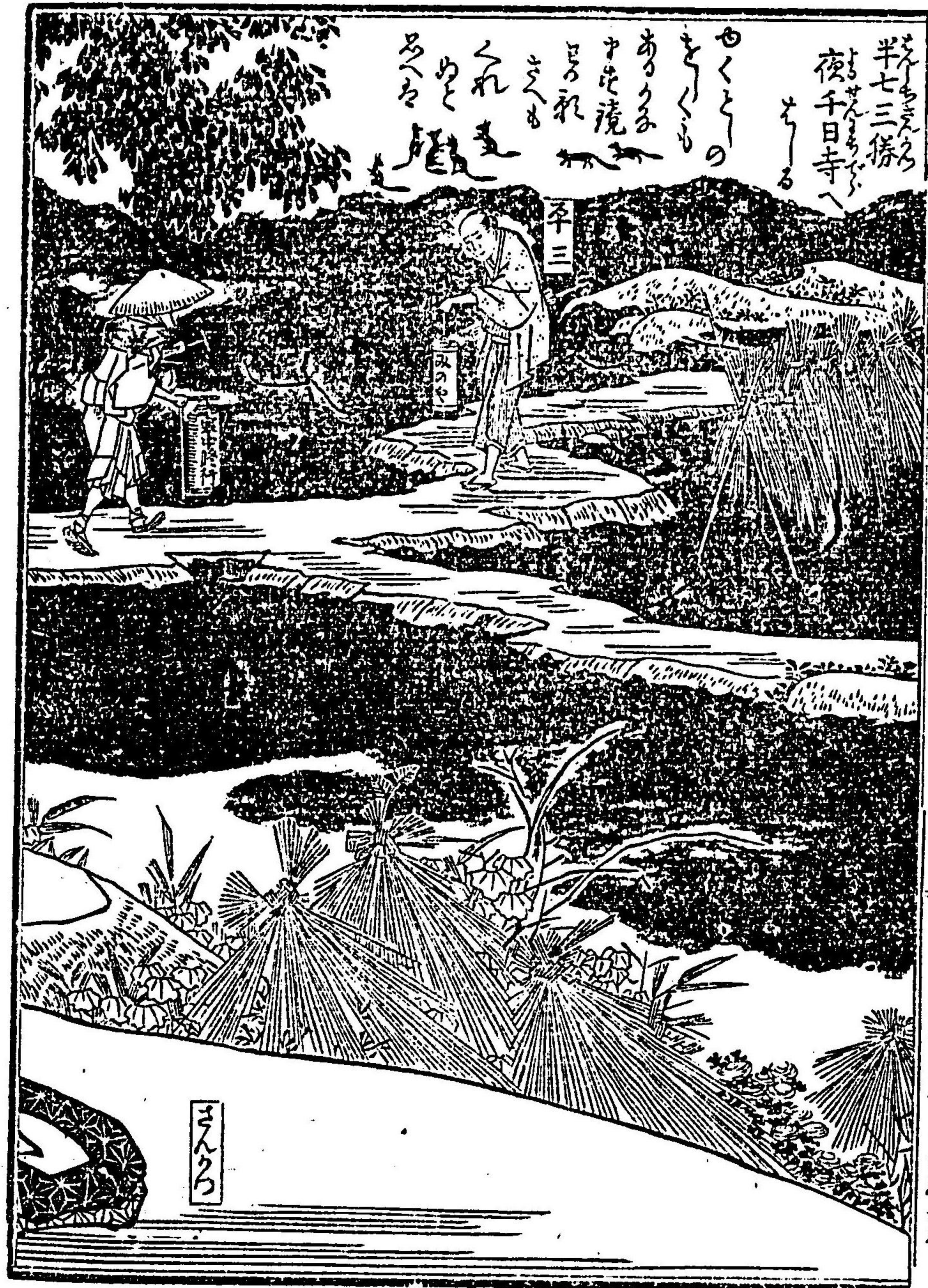
さても半七三勝ハ往來絶るを待ほじに彼此にて夜を深し涙の雨
よハさして行ふひあそなけれ夜の傘とばし人前を忘のべとも骨
ハ誰よかむトハれん竹田伏見も外に見て只後髪むけそりの町を
雄手ハ阪畝道田毎ハ星の影氷る身ハ捨果てなきものとおもへど
寒さ北風に追れて面をたのむらな師走七日を亡日とハさのふま
でも忘らざりし跡に残せし稚兒の父よ母よと啼ならハ春いかな
らん浪花津の梅が笠屋と簀虫の親の心ハ鬼ならで黄金も玉も何
かせん子にまは寶なきものをそれさへ今ハ思ひ絶て喜怒哀樂も



河内守

八

三三七



半七三勝
夜千日寺へ
行くの
まじり
ありうま
中は鏡
まじり
さも
これ
ゆき
あはれ

三三

下村

東京利史出版

三三七

みな夢の浮世と忘れとまだ醒ぬ。間酒煎賣夜商人。しがためならぬ
と寒念佛の鉦の音さへ何となく耳所らたまる霜の聲。無常迅速東
の間に。千日墓に着にけり時に。永祿某の年冬十二月七日なり。かく
て半七三勝ハ。立ならべたる印塔の間なる。枯柳の下に坐を占。なか
なかに覺期を究たれば。夫婦物いふべうもあトで。三勝が十遍ばか
り唱る念佛の聲を心あてに。半七やがて闇に晃く。腰の刀を抜こな
せば。墳の後。又二人。苦痛の稱名今般とおぼし。夫婦ハこれを聞て
大に怪み。これに等しく又こゝにて。自殺する人やある。やハ後れじ
とて半七がふたゝび刃をふり揚れば。やよ忘ばし待たまへ。と呼と
ゝめつゝ。厚倉二郎太夫友春ハ。蟻松曾太郎と。もに。蝶九郎に索を
かけて。これを可介等に引し。飛が如くに走り來る跡に續て平三ハ。
お通を脊負ひ。園花を扶掖。喘々追蒐來て。手にく。さし出す挑灯の。

火光に照らす墳の後に。思ひもかけず。敷浪と半六ハ。間五七尺を隔
て自害し。半七等を見て。忽地に。聲切たり。人みなこの景迹を見て大
に驚死。夫婦兄弟幼き。お通も共によゝと泣。或ハ悲み或ハ呆れ。こハ
そもいかにとて。慌忙つゝ。走り寄。抱き起して。さまゝに勦れども。
今ハてや救ふべくもあらず。と。見まハ。傍なる石塔に。二枚の遺書を
貼おきたり。そのとき二郎太夫すゝみ對て。半七等に。いふやう。各の
哀傷いと理なれど。つらくこの遺書の趣を見るに。赤根半六ハ。昔
榮利を謀りて。木精の祟を肩とせず。遂に米谷なる。老楠樹を伐りし
かハ。忽地。倅て。丹波都を殺し。更ニ約よそむきて。三勝を失ひ。蟻松氏
と婚縁を締したるとハ。みづかト作る。撃ありとハ。曉ありと。近曾半
七ハ。三勝を將て。長町ニ活業す。と傳へ聞。いよ。憤。堪ずして。その
虚實を。とん爲よ。昨夕。潜よ。五條の家を潜び出。稱よ。敷浪と三勝と。

親子の名告せし始終を竊聞して。てじえて夫婦の忠孝心烈をまつて。懺悔後悔し。こゝよ來つて自殺するものなり。願くハ三條河原よて二人の悪棍を殺し。又昨夜相合橋よて全八を殺せしものハ。半六なりと市の正へ訴。恩人笠松平三と。こが子半七を救ひたまはるべしとあり。又敷浪の遺書よハ二人の女兒の心操の比なきよ。ふりく羞且三勝の死を究たる氣色を猜し。こが身これよ先立て。自害す願ハこが小共等。必死を思ひと。まり厚倉ぬし。こが夫を諫て。是彼の身のおさまりを。よきよ計ハしたまへりし。りへすト。も孫のお通がと不便なり。典膳の、年來の恩愛ハ。こゝろよ耻ると多くて。こよハ申遺さずとあり。か、れハ親と親と。いひあはさねど。その身を殺して子を救ふ慈悲ハ。符節を合したるが如し。りなトすしも死すべりトす。又いたく悔歎くべからず。時なるかな。君侯近曾二郎太

夫を召さして宣ふとあり。赤根半七ハ。こが家第一番の忠臣なり。彼吉稚丸に従ひて。洛にありける日。主の淫樂を諫て。遠離らるゝといへども。ふかくこれを匿し。その身病ありと稱して。五條の旅宿に引退き。絶て口外へ漏さりしとぞ。これその比。灰よこの一條を聞き。よりて彼もの舞々を將て逐電志つる事。亦是主の爲にすとハ猜したれど。家の法度ハ私に更改がたけれハ。且く忠臣を遠離たる事いと不便なり。今ハてや夥の年月を経たれば。罪を宥べき時。到きり。汝潛よ半七が在家を索。こが志を告て。伴ひ來きと。仰せしりハ。志のひて浪花に赴き。まづ間人をもて窺するに。御邊三勝が身價を。これに返さんとするに。その金三十兩を遣ひへらして。いたく苦心するよしを聞假毛を買假托て。件の金を贈りしハ。こが寸志なるを。憎べし。全八蟻丸是を奪ひ去きりとぞ。さるるに蟻松曾太郎。こからずも

相合橋にて轉落つ、脱去らんとする。蝶九郎を生拘。這奴が盜とこ
 ろの金ハ舊の如くよて。とが手よ返きり。かくて蝶九郎が白狀によ
 つて。全八が隠隠いよ、發覺たれば。證迹として。この蝶九郎を市の
 正へ進らせ。御邊の罪狀を刪べきよし。曾太郎に相語。只今彼處へ引
 せんとす。寔に天の彰々たる事疊らざる鏡の如し。惡人終に亡びて。
 忠臣ふた、び天日を見る。誰か快とせざらんやと。事審に説示。曾
 太郎も又いふやう。某浪速へ來りし事ハ。半七とのに。妹が心操を志
 らせんとてなるに。とが母猶心もとなく思ひて。とりなく園花を轎
 に乗して。この地よ來たり。不思議よ年來の本意を遂て。離別の女兒
 三勝どのよ再會すといへども。却てその心烈よ羞けん。旅宿へハ歸
 らず。中途より往方忘れざるよし。後よ聞ゆ。園花も母に伴きて。長町
 に赴き。轎の中よありしかと。とが母耻て。三勝どのよあはせず。彼い

たづらにお通を將て旅宿よ立かへり。緣故を某に物かたる折しも。
 母の從者等走かへりて。如此々々なりと告よりて。とが兄弟ふかく
 怪み。園花ハ病苦を忍び。お通を將て彼此を索る折しも。とからずし
 て。笠松平三に名告あひ。御邊も又三勝どのと。二首の古歌を書遣し。
 自殺せんとて。出たまひぬるよしを聞て。ますく。周章し。やがても
 ろ共にこゝに索來れり。といふに。平三も又説と一遍。理を竭して。自
 害をとめしかば。三勝。園花ハさらなり。半七ハ。親の慈愛のかくま
 でなるに。君恩また黙止がたくて。紅涙袖を絞ゆへず。死後れたる悔
 しさよとて。かき口説ぬ。浩處に。編笠ふかくきたる武士一人。白楊の
 陸よりす、み出て。笠を脱捨るを見れば。蟻松典膳なり。このとき典
 膳ハ。衆人に對ていふやう。すべてこの件の禍を醸せし事。半六一個
 の悞のみならず。これも又當初。君に申す、めて。楠を伐らしたる

祟を惹るにや。愛に溺れて。よろづ私したる罪あり。志かるに今朝。敷浪が園花を將て。天満の天神へ詣るよしをいふに。疑しき處あれば。これも又潜し奈良を出。妻の迹を跟て。そのゆく處を窺ひ。嚮に三勝と敷浪が始終の物かたりを竊聞して。年來の憤も消。五十餘年の非を忘れぬ。さては。そのときこれ一等しく。裡の容子を張ひたるもの。半六にてありける歟。彼も是も皆。己が爲の善智識なり。棄恩入無爲報恩者といへり。願くは友春どの典膳が致仕の事を。よきに執したまはるべしと。述をわり。刀を抜て直し。髻を剪捨。みづから夢幻齋と名告らんといふ。二郎太夫聞て。ふかく嗟嘆し。淳于禁が蟻宮の榮花も。思へば赤根が南柯夢。蟻一象る蟻松氏の發心悟道殊勝なり。志からば。さきのふ。己が買たる鏡髪を。三勝が頭髻とし。又假毛を半七が髻に換。父と母との塚に築。龍鳳雪信女。月照信士と法号し。赤根半七

といふ商人。葦屋三勝といふ舞々。と情死せしを世に傳なば。郎君のおん悞に代たる。そじめの忠義もいたづらならず。親の枉死に從ざる。孝子の道も虧べからず。再世の夫婦。君父の命に從ひ。奈良へ歸參して。家を興し。忠孝を全せば。吾黨の一大怪事ならんと應けり。時よ典膳。又平三に對ひ。其許に舊梨園雜劇中の人なりと聞しが。心さまハ武士も及ざる處多し。わが女兒園花。久しく夫に置去せられて。歸とあるなし。御邊今より。彼を養て女兒と志たまはらば。われ又三勝を養ひ。曾太郎が姉として。更に半七に妻あはすべし。志かるときハ。三勝ハ半七が正室なり。園花又半七が側室となるとも。姉妹よして姉妹よならず。孰かこれを譲るべき。この事承引たまへかしといへば。平三歡で一議し。も及はず。肆既一團圓におさまるぬ。さる程に半七。曾太郎。三勝。園花の兄弟親族の名對面して。歎の中。の歡を述。父母



可阿事...

十三 東...



可阿事...

東...

の亡骸を千日寺に葬りて。追善の佛事叮嚀し修行し。志かして後皆
うちねれたちて。南都へ立歸りぬ。又曾太郎ハ市の正へ縁故を審よ
訴蝶九郎を進らせしかば。積惡脱がたくて。蝶九郎ハ首を刎られ。又
笠松平三ハ鬘に脚平足平を殺したれども。彼等二人ハ。隱なき惡棍
なるによつて。死をもてその罪を贖ふに及はず。永く放免を蒙り。や
がて續井家に召れて。祿五十貫を給はり赤根半六に代りて。五條の
村主をうけたまはり。半七ハ蟻松典膳に代りて。家老職をうけたま
はり。職祿ともに肩を比るものなし。これによりて。三勝を妻とし。園
花を側室とし。厚倉と共に。一國の成敗をとり行ふに。聊も私なかり
志かば。君家ますます繁昌して。四民すべて父母の思ひをなさず。や
いふ事なし。是より先。續井順昭父子ハ。半七。三勝等が忠孝をふかく
嘆賞して。懇切にこれを勞ひ。厚倉以下の家臣を呼び集ていふやう。

抑この作の縁故を考るに。われ過て驕奢に耽り。怪有の良材を索て
米谷の楠を伐らし。無益の茶亭を造りて。樂を民と、もにせず。こゝ
をもて嫡男吉稚質弱多病なりき。且彼が養生の爲に。洛に遊ぶ。至
て忽地家の艱出來なんとしつる事。みな木精の祟なりけん。設半七。
二郎太夫なかりせば。父子安然と志て。今日の歡會をいたすとあり
がたかるべし。を頻に慚愧し。俄に彼茶亭を毀て。長く節儉を事とせ
しかば。上下安堵の思ひをなす。こゝに至て。半七が浴よて。吉稚丸
よ苦諫せしとき。却全八蝶九郎等に讒言せられ。久しく君邊を遠ざ
けらるゝをいへども。なほ耶君の悞を世よあらせむとて。病よよつ
て。五條よ退保養す。といひ拵へ。後終に三勝平三等にも實を告ず。た
ゑて一トたびも口外せざりし事。や、聞へ。この一條よて。その忠臣
思ひやらるゝとて。時の人稱嘆せざるハなし。されば平三ハ。お通を

養ひ。後これに婿を招て家を嗣し。半七又子ども影を儲て。世々續井
 家に仕けるをぞ。△馬琴按ずるに。本草綱目卷三十四。木類下に楠樟
 を並出すといへども。別種なり。こが邦にハ。楠樟ともにくすと訓ず。
 おれを一種とするが如し。又按ずるに。搜神記に。吳の時。散叔。大樟樹
 を伐るに。血出て物有り。人の面狗身なり。敬叔がいふ。これを影侯と
 名つくと。乃烹てこれを食ふに。味狗の如しといへり。是則樟樹に木
 精ありし一證とすべし。楠も樟も究て大木多し。俳諧師其角が楠の
 天井に懸する發句あり。作得てよし。

八疊の楠の板間を漏るまぐれ

又半七三勝が事。世にハさまとにいふめり。或ハいふ笠屋三勝ハ
 足利家の時の女伎なり。又千日寺にて情死せし三勝ハ。遙に後の事
 にて。美濃屋何かーが女兒おせんと呼れたる淫婦なり。今なほおせ

ん半七の遺書といふものあり。好事のもの往々傳寫すおもふに子
 が話説する。續井家臣赤根半七と。大和五條の商人半七が事とよく
 似たり。まづれども時代相拒と遙にして。同名異人なりと云るを。し。
 立峰集を按ずるに。俳諧師嵐雪ある年の秋浪速に遊びて。夕のや茜
 の夢の跡を訪ふ。嵐雪月照と。石の塔婆に彫入たり。あるまじき事
 ならねど。思ひがけざりければ。

夢よよく似たる夢かな墓参り

と口號たるよし見ゆ。惜らくハ何の處と今法善寺難波新地にあり土俗のに遺る
 とあるの。半七おせんが古墳といふもの。金毘羅堂のみなた。向て左
 側よあれど。六字の名号のみを彫書たり。彼もの、事を傀儡棚の戯
 曲に作りたるもの。子が眼を過る所。すべて四本あり。又彼等が遺書。
 當初人口に膾炙せしよや。眠竹といふものに。三勝半七が紀念おく

り。かき置等の曲子あり。無益の辨なれど。只その概略をいふのみ。
△作者馬琴この書を稿じをひるの夕。燈を掲案を拊し。ひとり嘆じ
て云。むかし信濃前司行長入道の平家物語ハ原謠せんとて作り
たる後。後の人ハよくも見されバ。只尋常の軍記とのみ思ふめり。
今こが南柯夢ハ讀せんとて作りたれど。閱者その戯曲めきたる
を笑ふもあるべし。才の長短と物の巧拙ハ且くいはず。所爲に雅
俗あり。又流行あり。夫流行ハ人よある歟。將我にある歟。これいま
だこれを忘らず。差夫。

三七全傳南柯夢卷之六下終

客有問於予曰。曲亭先生。何据號之。曲亭予應之曰。漢書陳湯傳
云。樂巴陵曲亭陽。是矣。亦問馬琴何也。曰。取十訓鈔野相公句。才
非馬卿。彈琴未能。身異鳳史。吹簫猶拙。以爲戲號也。先生嘗景慕
司馬相如才。是以名解字瑣吉。解蟹也。郭璞江賦云。瑣珞。腹蟹。水
母。目蝦。其象名於蟹也。王吉之所夢。亦是長卿故事也。客欣然。而
喜曰。善哉。與君一夜話。勝似十年學矣。愚問常以爲馬琴。熟字絕
無考据。而今問諸子。則豁然得其淵源。顧昔者司馬長卿慕蘭相
如爲人。後名相如。今也曲亭子慕司馬相如才。而名解稱馬琴。有
以哉。雖和漢今昔異其趣。宜同年而談之。先生聞之笑曰。二子蓋
知。故玉與石。而談暨千茲也。差夫以而非之者。齊魯曾參乎。我爲
二子深羞之。後莫言。客唯々而退。予時方稟師命。校南柯夢若干
卷。因悉次是語。附於篇後云。
文化四年乙卯冬十月中浣 弟子東園魁書子書於東都裝笠軒
時雨窗

明治十五年十月廿六日 編輯御届
明治十六年三月十五日 出版

定價金貳拾錢

東京京橋區南傳馬町三丁目十三番地

編輯出版

東京 稗史出版社

東京府平民

出版委員

白井 五郎

東京京橋區新榮町
二丁目五番地

三七全傳南村夢

全拾七冊

豫約正價金貳圓
定價金三圓四拾錢

此書は明治十五年十月より同十六年一月まで毎月壹冊宛出版し同二月の特二冊を出版し同三月より五月までの毎月三冊宛出版して全拾七冊を完備せしむべし豫約購求を望まると諸君の豫約正價金貳圓并に書籍郵送料金六拾八錢を添へ申込あるべし前金送致なき向に總て定價申受くべし

